郷土教
第八号
35.9.1
兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話七五〇番

本多忠可と心学（中）

四島田　清

中沢道二は、さすが心学の先生だけあって、手紙を書いても実に詳しく、克明である。本多忠可が青少年時代より勉学に耽り、ほかのことには一切、手を出さなかったこと、名高い儒者や名僧の話しを聞くと直ちに屋敷へ招き、その講義を聞いたことなど、家老の岩崎又左エ門以下、藩中一同の者が見聞して熟知していたことであり、それをこもごも道二に語ったのであろう。もし、忠可がどんな学者を呼び、どんな学問をしたかを、更に具体的に知ることができるとおもしろいのであるが、今のところでは、到底それを望むことはできない。したがって、この手紙や忠可の書きのこした懐紙などから、わずかにその片鱗を想察するよりしかたがない。多少、大胆であるが、私がこれまでに捉えて来た忠可の性格や傾向を率直に述べてみると、飽くまで実際的であり、実用的な色彩が濃いい。たとえば、学問にしても、文芸のようなものはあまり好まず倫理、道徳、あるいは政治、経済といった方向に心を向けていたと考えられる。更に極論すると、政治は人倫の道を明らかにするにある。といったような強い倫理観から出発して政治の弛緩を引きしめようと考えたと思われる。こういう点からいえば、忠可の思想の根底には儒教の考え方が根強く入っているのではあるまいか。しかしながら儒教は、ともすると理論に走り、抽象的な概念にとらわれやすい欠点がある。眼前に展開するもろもろの事象を的確にとらえ、それを適切に指導して領民を安堵させるという点からはやや話しがむつかしすぎ、遊離しやすい傾向がある。生来、真面目で実際的なものの考え方を強く抱いていた忠可は、こうした点で儒教にあきたらなく思ったのであろう。また、いろいろの名僧の話しにしても古い仏教の臭味を脱することのできぬ印象がつきまとい、素直にその中に自己を没入させることができなかったのに違いない。そうしたときに現れたのが中沢道二である。江戸市中の庶民教化にいちじるしい効果をあげ、漸く名声の高まって来た中沢道二の講席に、傍医師山野辺直三が出かけたことから、その話が忠可に伝えられ、忠可の心がその方へ惹かれる機縁ができた。天明元年四月六日朝五ツ時（午前八時）、用人名島庄太夫が正式の使者となって道二を訪れたのはすなわちその結果であって、道二が再三辞退したにもかかわらず、許されないで、遂に翌七日の同時刻より講話を始めることとなった。

この時のありさまは、道二の手紙で手にとるようにわかる。すなわち、正面の中央に本多忠可、その傍のみずの中には奥方、側付女中、その次のみずの中には家中の女房連、また忠可の次の向には江戸詰家老の岩崎又左エ門、用人名島庄太夫をはじめ家中の者が残らず詰めかけていた。四月であるから、暑くもなく、寒くもない、という季節ではあったが、それでも、町人の道二の話を聞くために、忠可以下諸士すべての者が袴、上下をつけていたというのは心からの敬意を払っていたからであろうし、意気込みのほどもうかがわれる。また、そうした場所において、どんずの上にあがって講話する道二の名誉と得意とを思い浮かべると、私は、一八〇年前のできごととは思えぬほどありありとその光景が浮かんで来る。ともかく、この時の山崎藩邸（江戸、上浜町の上屋敷）は、近年にない賑やかさであったと思うし、いきいきとした空気に満ち満ちていたと考えられる。道二は、この日、四ッ時（午前十時）より講義を始め、九ッ時（午后〇時）まで二時間続けて「高時絵の重箱」という話しをした。そして昼食をご馳走になったのち、更に九ッ半時（午后一時）よりヒッ時（午后四時頃）まで「しやくしぼさつ、すりこぎぼさつ」の話をした。（「高時絵の重箱」あるいは「しやくしぼさつ、すりこぎぼさつ」の話しがどういう内容を持っているかということは『道二翁道話』をひもといてみるとわかるのではないかと思うが、手もとにその書がないので他日に譲ることとする。）午前二時頃、午后三時頃、ぶっとおしで話しをした道二も熱心そのものであったが、行儀よくすわって、これをじっと聞いていた忠可以下の藩士達も実に真剣であったといわねばならぬ。手紙の中に「殿様、一家中様方、大きに感心被成」と書かれているのは、その光景をよく写したものといってよかろう。

これより、道二の出講は毎日続けられ、十一日には植村嘉兵エと一しょに出かけた。植村嘉兵エは京都の人で、営って安永八年（一七七九）、手島堵庵とともに、京都今出川千本東入町に時習舎を設けたことがあり、同年三月には堵庵の命をうけて中沢道二とともに江戸へ下って来たのであった。そして、この日は道二とともに講座をつとめたのであった。

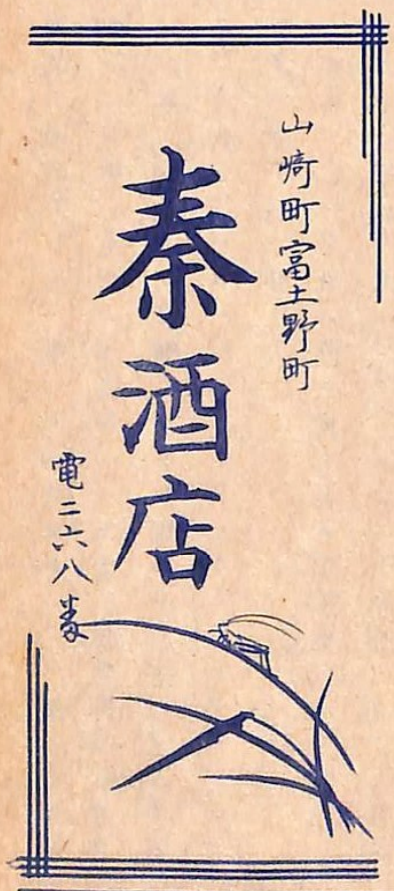
忠可は、何事でも徹底的に追求したい性分の持主であったから、心学についても道二の指導にしたがって最後まで努力し、一二日夜は八ッ時（午前二時）に至って発明を完了した。心学の指導では、この発明をしないものはほんとうに腹にはまったものと見ていなかったが、忠可は率先してこの追求に精進し、一二日夜は道二を屋敷にとどめて自ら反向し、奥旨の体得につ

とめた。仏教における禅宗の修行に比較するのはあまりにも大げさ過ぎるけれども、心学には、ちょっとそうした部面があり、これが人心に深く食い入る結果となって、あれまでの教化の実をあげたのであろう。一二日の夜明けを待たずに道二が忠可に呼び出され、宿題の解答を聞いたところ、〝甚だ済口がよかった〟というのは、答がはっきりと的にあたり、心学の中心思想を会得していたことをいうのであって、これから後の忠可の思想的中枢はこれによって形成されたといってさしつかえない。忠可が心から喜んだというのも当然である。そして家中の者を残らず入れたのも、その熟心な指導、勧誘によるものであろう。一五日になって用人の名島庄太夫、江戸詰家老の岩崎又左エ門、侍医師の桑田道吉、家中の木村平吉、磯部磯之助、富沢文嘉、医師貞三妻女もそれぞれ発明を終り、熟心なその同志となった。

ふりかえってみると四月七日より一五日までの一週間に、本多家江戸藩邸の者が上下をあげて心学に傾倒し、その熟心な支持者となったのは驚くべきことといわねばならぬ。中沢道二の説話力というか、指導力というか、教化の効果は実にすばらしいといってよいが、同時に、これは、受入れ側である忠可の求心的な熟心さと努力が作用していたからにちがいない。忠可が本多家中興の英主といわれるような思い切った改革を行う根底は、こうしたところから出発しているのではなかろうか。

五

中沢道二は、享保一〇年八月一五日（一七二五）京都に生れ、名を義通、通称を亀屋久兵エと呼んだ。明和二年（一七六五）東嶺禅師の法筵に列し、万物唯心の境地について大いに開悟するところがあり、翌三年には更に霊元禅師に謁して教えを受けて大いに推賞されたが、その後、布施松翁の手引きによって手島楮庵の門に入った。安永八年（一七七九）三月、楮庵より送拔され関東布教の大任を担って江戸へ下り、日本橋通塩町の炭屋源蔵方に寓居して伝道の事業を開始した。江戸は兼愛慈音尼が嘗って遊厂したところで、心学とは無縁な場所でなかったうえに、道二の学徳と洗練された道話ならびに不眠不休の努力とによって、遂に百年興隆



の基礎が築かれたことは特筆大書する必要がある。出府の翌年、早くも心学の声価を四方に響かせ、一般庶民の中から炭屋源蔵・同佐兵ヱ・尾張屋源六・同弥三郎・丸田屋幸右ヱ門等の世話人をつくったばかりでなく、大名の中にも本多忠可のような熱心な心学修業者を見出すようになったのも、すべて道二の功績であった。

道二は、この後、間もなく尾張屋十兵ヱを都講として日本橋通塩町に参前舎を作り、天明二年（一七八二）には米田一貫を都講として日本橋薬場町に慎行舎を起し、更に寛政二年（一七九〇）山形屋又右ヱ門を都講として四谷伝馬町に蓋簪舎をつくった。参前舎は、この間に神田小川町に移り、更に神田相生町に堂々一二〇畳の大道場を新築し、いわゆる江戸三舎となったが、これが関東心学の中心道場であった。

道二が、晩年になった頃、全国の心学講舎は、二四カ国に跨って八一舎を数える盛況となったが、そのうちの二一カ国は彼の布教圏に属し、二一舎は道二およびその高弟を尊師として設立したものであった。

道二には、自ら筆をとって書いた著書はないが、その道話を門人達が聞き書きしたものがある。『道二翁道話』（六編・一五巻、寛政六―文政七年刊）、『道二翁道話統編』（四篇・八巻、天保一四―弘化四年刊）、『道二翁前訓』（一巻、天明九年刊）『道二翁童蒙訓』（三巻、文化一二年刊）、『道二先生御高札道話』（一巻、初刊年月不詳）などが即ちその主なものである。享和三年六月一一日（一八〇三）七九才をもって江戸の参前舎で歿した。

なお、この手紙の宛て先である松葉屋伊右ヱ門は、道二と同年の享保一〇年一二月二二日京都に生れ、呉服商を家業としていた。諱は矩道、普通、布施松翁と呼ばれ、この手紙をもらった年より二年後の天明四年七月七日（一七八四）、六〇才をもって京都に歿した。松翁は、はじめ富岡以直について心学を学び、後に、宝暦七年（一七五七）から手島堵庵にも学んだ。松翁は、京都心学者達の早い頃の会輔席であった尊性塾会の都講として活躍したほか、京都に近い国々へも出向いて布教につとめた。また、道二を誘って心学に入らせた関係もあって、両者の交情はなかなか、こまやかであった。

著書に、『西岡孝子行状聞書』（一巻、明和七年刊）『松翁ひとり言』（一巻、刊行年月不明）『松翁道話』（五編・一五巻、文化一一―弘化三年刊）がある。

（未完）

樽井守城の軸

安井寅一

或る所にて俳画三十余人の人物に、それぞれの和歌と氏名を、守城一人で書いた一軸を見た。画中の人物は何れも風流人らしい姿で、僧侶もあり、武士も町人もあるが、全部チョン髷であるのも面白い。之れによって幕末より明治初期に於ける山崎の歌道が如何に隆盛であったかも想像出来ると共に、当時の歌人を知る資料ともなるので、ここに其の歌と人名を紹介する。

樽井守城は九右エ門と称し、文化十年出生、箕谷と号し、晩年九翁で通した。和歌と書画に巧みに謡曲社舞も堪能であった。明治十年六十五才で没しているので、此の軸は死亡の前年明治九年に書いたものである。

軒近く椎の実落るおとはして、雨ともならぬ秋の山霧　横井候通

和田の原西ふきそむるあしたより、秋のいろなる波も立けり　青蓮寺庵羅

民草をめくみたまひし春の日の、高津の宮に立かすみかな　名嶋好孝

鶯のこゑ猶寒しあわ雪の、ふるすの竹の菜ごもりにして　安原尚之

いつしかと枯ゆく霜の下草に、おのづからなる冬の色かな　妙勝寺佐妙

踊り子の手習ふわざも君の代は、千代に八千代とくりかへしつゝ　稲岡秋平

けふといへばたゝ鳴鳥の初声に、神代おほゆる明方の空　富和清世

になきて雲井はるかに行雁の、やすらふまなき恋もするかな　小野千世

日の本の国のしつめとうごきなき、山や神代の姿ならまし　樽井すみ

千町田に伊保の川水せき分て、やすけくすめる山崎の里　大住雅綱

去年の秋の水にせかれてしからみと、なりし柳も青む春かな　妹尾正孝

ひぐらしのなく音も遠くなりにけり・夕風
たる山崎の里　安井克彦

あすしらぬ命とおもへばきのふ見し、花のさ
かりをけふもとはまし　志波有道

さ保姫の袖師が浦のうら波の、うらのどかに
もかすむ雨かな　大住千座女

鴻鳥のうきては沈み沈みては、うきにいとま
のなき身なりけり　前野真門

おもふとぢかきおこしつゝ埋火の、なこりな
きまで語る夜半かな　田中昌宏

大井川水のしら波かほるなり・ちるかあらし
の山ざくら花　高井雅言

去年といつはきのふも遠くおもほへて、うき
事しらぬ春は来にけり　前野謙夫

春草の青野のはらも秋はぎの、下葉よりこそ
色つきにけり　稲岡阿丘

あすこゆる山路の春をおもひつゝ・夢の行へ
にきゞす啼なり　妙勝寺嘉子

更ぬるか虫の声さへかたよりて・蓮のつゆに
月ぞうつろふ　小野美枝

ほとゝきすしけきさくらの葉こもりに・たゞ
一声をもらしつるかな　常木久藤

よそに見る神やなからむ大君の・御代やすか
れといのるこゝろを　妙勝寺日扇

あはじから夜半のしほ風はやからし、月をの
せくるはまの浦風　菅江長茂

春の代の春のはしめの花なれば、梅はさかり
の久しかるらむ　樽井貞彪

須广の浦にふねのりせんと月までは、うしろ
の山になく郭公　堀内尚鞆

けふもまた風になかれて行鳥の、はやくもす
ぐる夕立の雨　河瀬長清

営のねくらの花に露みえて、雨はすむなり春
のあけぼの　池田知平

をとめ子かあかもすそひく朝露に、ぬれてい
ろそふ常夏の花　山下重時

しばらくはまじりてふりし雨の跡の・氷る方
よりつもる雪かな　樽井守城

かくものするは年の名をあきらかに治るいひて、九かへりにあたれる年の秋御代な賀月とことほくならば咲て久しき菊のしづくをとき波のすみにそゝぎて、命毛も長き筆をそめつゝ高井雅言がために

六十四翁　樽井守城

辨圓の墓（下）

赤松圓琳

山崎町川戸字奥所に、鎌倉時代初期の人、明法房弁円の墓五輪の塔があることは前号に記述したので、その続きとして弁円の概歴を書いて見る。

親鸞上人門下二十四輩の一人、板敷山の弁円として有名な上宮寺の開基明法房弁円について、郷土宍粟郡に存在する文献や、古老たちの語るところによれば、昔、川戸村に山伏が居住した屋敷跡と伝えられる東山院上之坊がある。その場所に生れたのが弁円であるという。

史書を繙くと常陸国那珂郡東野尾村の人、明法房弁円がこの世に呱々の第一声を挙げたのは、治承四年（一一八〇年）五月の頃で、天下の状勢は平家の全盛期も末を迎え、頼政を始めとして、頼朝、義仲の軍勢と次々に諸国の源氏が蜂起し、武家の統領源平が一門の盛衰をかけて、六ケ年間に亘る攻防戦を起した年である。

弁円の母は藤原摂政家に仕えていた為、皇城の錦都に於て誕生した弁円は、幼名を珠王丸と名付けられた。あたかも飢饉は二ケ年に及び、京中には疫病が流行し、死者は巷に満ちあふれていた。これをうれいた珠王丸の母は、この危難をさける為に、寿永元年（一一八二年）漸く三才になった珠王丸と、わずかの従者を伴って、故郷の川戸村へ帰りついた。

しかし、その翌年、珠王丸の母は長逝したので、四才の時より祖父母の手によって養育せられたと伝えられる。やさしかった祖父母もまた世を去り、天涯孤独の身と成った珠王丸は、建久六年（一一九五年）の秋、十六才で京都に上り、名も弁円と改め、聖護院の門に入り、比叡の山塔や三井の園城寺において、一心不乱に修験道を学び、同門中並ぶ者なき行者と成り、播磨国比地郷川戸村をしのびて、播磨公弁円と称した。

天性豪放快活にして不屈の斗志を抱く弁円は、身を慎しみ行いを正し、いつしか山伏の司となっていたが建保二年（一二一四年）三十五才の時、弁円の徳行を聞いて激賞した常陸国の領主、佐竹左エ門尉季貞の招聘によって下向、好遇を受けて国内修験道の総司と成り同国久慈西郡塔ノ尾に法徳院を建立して、末派十二坊

をその支配下に治め、甲賀坊、吉祥坊、小川房等三十数人の弟子を従え、領主を始めとして国内の四民たちは、弁円の才智徳望に心服していたので、その威勢なかなか強大であった。

承元の法難によって、越後国に配流されていた親鸞上人が、流罪赦免の朝恩に浴し配所を発足して、建保五年（一二一七年）常陸国迄来られて　稲田九郎頼重の乞いにより、笠間郡稲田の草庵に落着かれるや、近郷の四民は上人の御高徳になつき、その宗派が大いに弘まった。

弁円は、上人をいたく嫌悪し、板敷山南麓の草庵、（現在の新治郡恋瀬村の大覚寺）に、三十五人の弟子を集結して時機を伺っていた。

やがて板敷山の山頂に、白木の拝壇を設け、不動明王を観請して、しめ縄を張り、親鸞上人を呪殺しようと七日七夜、一万度の護摩を焚いて祈願したが、その効更になく、承久三年（一二二一年）の秋、弟子を率いてこの板敷山の要害に於て、上人を邀撃して新殺せんとしたが果さず、親鸞斬らずば止まじと、稲田の草庵に駆けつけたが、高徳溢れる上人の尊顔を拝し、憎悪の邪心悪く去り、衷心より懺悔の涙にむせび、三十五人の山伏と共に修験道を放棄して仏門に帰依し、上人の御弟子となり、名を明法房と賜って朝夕上人に近侍し、仏道を修行する身となった。

山伏から僧侶に転じた明法房は、記録によると、六尺一寸（約一米八十五糎）二十五貫八百（約九十七瓩）といわれ、実に堂々たる偉丈夫であるが、正直にして師を崇敬すること厚く、或る日上人の帰庵のおそいのを案じた明法房は、上人をお迎えに出向き、板敷山で師の上人帰られるを見て涙を流してよろこび、その時の心境を詠んだ一首に

山道も山も昔に変らねど
　変りはてたる我が心かな

がある。

建保五年（一二一七年）から約十五年常陸国に留まられた親鸞上人は、貞永元年（一二三二年）、往則れた稲田の草庵を出発され、帰京の旅に上られた。

親鸞上人の帰京后、修験者の総司時代の本拠地、法徳院へ帰った明法房は一宇を建立して法尊寺と名付け

宗派を弘めるように努力をつくした。

あやまちを謝さんが為に楢原へ
また帰り来てみのり弘めん

右の一首は、法尊寺に於いて弁円が、当時の胸中を詠んだものといわれている。

法尊寺に住すること十九年、建長三年（一二五一年）十月十三日、弁円は入寂したので、法尊寺の南方約五丁の地点に葬る。時に年七十二才の大往生であった。

茨城県那珂郡玉川村東野字楢原に、現在も法尊寺がある。ついでこの法尊寺は、安土桃山時代を迎えて、天正五年（一五七七年）に至り、那珂郡嶺田に移し、寺号を上宮寺と改称したが、続いて天正十一年に、全郡米崎村に移り、明治維新の頃は、弁円の墓もこの上宮寺に移祀するようにしたと伝えられる。

弁円は、弟子の吉祥房を病床の枕辺に呼び、自分の遺骨を川戸の里にも葬るように遺言して長逝したので

牛肉
豚肉
かしわ
ソーセージ
買うて安心　たべて満足
浦精肉店
神姫バス前
℡二六番

吉祥房は師の遺骨の一部を抱いて播州に帰り、川戸村に葬り小塔碑を建て、その近くに草庵を結び、師の菩提を弔ったという。

弁円死してより既に七百十年、川戸にある五輪の塔は、徳川中期頃（大体正徳年間）の建立と推察される が確たる文献は見当らない。

道標立石に讃す

山崎東　福井　生

春秋ここに百五十　人生行路一すじに
守りも長き年月を　今に伝えて路巷に
一角占むる立石の　その積恩を思うべし

三博士五鬼三奇人　時寛政の治のさなか
同じ九年に之を建　方九寸に丈け五尺
流麗溢る石文字は　天下の能筆青蓮寺

日諒上人之を書く　刻字は名工お抗彫り
南はたつのあぼし道　東はあんじひめじ道
施主は綿屋に小林屋と　跡つぐ人は今知らず

幼なき時の思い出は　つきせぬ石に片思ひ

春は摘み来し蓮花草　秋は手折りし彼岸花
共に供へしまゝ事や　か細き指をたどりつゝ
手習いすなる文字の上　又は折ふし見たりける
若き男女の人目垣　法へて読しこの文字
同行二人の遍路笠　傾け読しこの文字
　　豊年参り伊勢参り　　三々伍々の若者が
声張り上ぐるざれ歌も　　石の前には〆夕止みぬ
さもあらばあれ如何せん　現世無用の鈍物と
蔑められて田の中に　牛車のために伏し転び
犬馬の糞にけがさるゝ　あまりの事の悲しさに
こゝに有情一人あり　再びなれを抱き起し
旧恩謝して供養せり　有用無用は人ごころ
定めなきこそ楽しけれ　耳をすませば声がする
汝答へて申すらく　石は無情と云ふなかれ

佐用、津山方面見学旅行記

横井怨一

昭和三五年五月廿二日、日曜日、午前六時半、神姫観光バスで出発、同行六十七名。

薫風爽やか趣味の旅にあつらえ向き。婦人の方の中には山崎町の西北端、切窓峠、土万方面も初めての方もあるらしく、八重谷峠、南光町三河方面、さては千種川の清流を珍らしげに眺めて居られる。車中、例によって福井先生の愉快な説明、横井より太古からの宍粟と佐用の関係、志水氏より徳久、平松方面の古墳についての話を聞きつゝ朝霧こむる佐用坂をこして佐用町に入る。

車を佐用町円応寺に止めて、元弘の昔を偲ぶ。碑は高さ一丈五尺の自然石、題字は故有栖川宮殿下の御染筆、碑文は其の側に別れて建設され台石と併せて地上から三丈五尺、御醍醐天皇隠岐の国に遷幸し給う途次元弘二年三月十五日この地に御一泊。

つゞいて円応寺跡の名木松柘をみる。今はその枯木をのみ残す。御醍醐天皇御手植のものと伝えられる。側らに小字あり、円応寺（禅宗）南山大朴玄素の位牌がある。

有名な佐用の朝霧の中を佐用川を渡り、佐用都比売神社に参拝、見村宮司の御懇切な説明をきゝ宝物を拝

山口の自転車代理店
バイクモーター各種
有限会社
坂元商会
町本
TEL. 366

観して長尾に出る。この辺りから北平福利神城趾を、又南佐用町の如意輪山禍願寺跡の天然記念物、大公孫樹を望見する。この公孫樹周囲三丈四尺、高さ百二十尺、樹令凡一千年。

現在の佐用高等学校裏にある佐用塔石を見る。往昔宏大な七堂伽藍があつて五重の塔の中心柱の台石と称されている。

高等学校前から乗車、佐用の町を過ぎ、高倉山、上月城趾を車中から眺めて、羽柴秀吉、山中鹿之助等の奮戦を偲ぶ。

兵庫県の最西端、上月町を西に進み、岡山県英田郡に入る。思いなしか何となく山野の趣も変つた様に感ぜられる。土居、江見、林野と、ガイドさんの説明をききつゝ西進、昼前美作の要都津山市につく。

市観光課の御好意により観光課員二人の案内で史蹟の都、観光の都、文教の都（人口八万余）を視察する。

先づ津山城跡鶴山公園、津山城は慶長八年森忠政が美作一国（十八万六千五百石）を領し入国共に前后十三ヶ年をかけて築城しただけにその規模壮大である。一切の建造物は昭和の初破毀されたが城趾はそのままに残り鶴山公園として一木一石昔を語り更に美作平野津山市街絶好の眺望の地、春は桜の名所として津山市を代表している。市の観光施設もよく行届いている。

一々詳しい説明をきゝ終つて各自持参の昼食を喫す。其后津山の繁華街を見物、夫々銘菓、人形等の土産物を買入れ津山郷土館に至り、発掘の陶棺、其他の資料古文書等立派に蒐集整理保有されており詳細な説明をきく。

それより車で西進、作楽神社に参拝、「天莫空勾践時非無范蠡」の児島高徳を偲ぶ。更に車を戻して旧士族屋敷を通り鶴山公園の北、衆楽園を見る。津山藩が他藩の便節を城内に入れず、ここに招いて外交の場としたという誠に美しい名園である。昔は今の三倍もあつたとか。

時間が相当おそくなつたが折角の機会だからと、市の東北丘陵にある弥生式住居遺跡を見る。二千年前の炭化した建築用材が木組屋根組の姿そのまま復元している。現代文明生活との比較実に面白い。

四時半頃になつたので、津山市観光課の方とも別れて帰路につく。

日暮れて山崎につくまで福井先生の御指導で美声をはり上げての咽自慢、居眠る暇もなく実に愉快に行事を終る。

因に津山市観光課で頂いたレコード二枚、教育委員会に保管してありますので、必要な時、借っておきき下さい。

赤穂見学旅行案内

四十七士の史実を見聞して、絶勝御崎の風景を観賞し、更に室津の古事を探らんと、この見学旅行を企画いたしました。御賛同の上、希望の方は早目に会費を添えてお申込み下さい。

一、日時　九月二十五日（日曜）
　　午前七時　神姫バス前出発
　　午后六時　帰着の予定
　　昼食は持参の事

一、会費　金貳百五拾円
　　交通費、拝観料等に充当

一、見学予定地
　　花岳寺、大石神社、赤穂城、大石旧邸、
　　御崎海岸休憩所にて眺望満喫、坂越大避神社
　　室津明神社、室君の浮運寺

一、申込所
（下記最寄りへお申込下さい）

		電話
町役場内	教育委員会	七五〇
本町	志水成文堂	五四七
門前	安井寅一	一〇一
本鹿沢	横井恕一	五〇九
山田	福井託次	四一三

神報

○山崎神社夏祭を七月十七日に西鹿沢地元の企画にて盛大に執行せられました。毎年継続すると申合せておられます。

○本会々員も追々増加しておりますので、会誌の内容も一層充実いたしたく、材料又は原稿の御送附をお願いします。

会員名簿（8）

山田町　妹尾　聰治
出水町　宇津原大介
富士町　福田　義雄
今宿　井口　光司
東鹿沢　高野　三郎
門前　塚本　三郎
高等学校　吉田　道生
小学校　尾川　先生
〃　織田　三郎
中学校　原田　定夫
一宮町　進藤　正平
〃　田路　幸
〃　塚本　光治
〃　秋田　新
〃　中尾幸治郎
竜野高校　富岡　儀八
大阪　島下八重子

大衆食堂
三本屋
中央通商店街
七四番